

マルクス経済学の再生

—— 杉原四郎『マルクス経済学の形成』研究序説 ——

片 岡 俊 郎

I

杉原四郎氏の『マルクス経済学の形成』⁽¹⁾（未来社、1964年）は、マルクス経済学を現代に再生させたという意味において優れた書物である。われわれは再生の意味を求めて、杉原四郎氏の『マルクス経済学の形成』を順次考察してゆくことになるのであるが、その手始めとして本書の「はしがき」を問題にする。杉原四郎氏が「はしがき」で取り上げている事柄を、氏自身が「はしがき」でも述べている本書のために準備として作成したという前著『ミルとマルクス』⁽²⁾（ミネルヴァ書房、1957年）と他の二論稿、「マルクスの経済本質論に関する一考察」⁽³⁾（関西大学『経済論集』XIII 1・2号、1963年）、「改良と革命の経済思想」⁽⁴⁾（岩波書店『思想』1963年12月号）に限定し、考察することによって思想史家としての杉原四郎氏に光をあてること、これが本稿の目的である。

（注）(1) その後改訂版が出されている。杉原四郎『マルクス経済学の形成』改訂版（未来社、1974年）。

(2) その後増訂版が出されている。杉原四郎『ミルとマルクス』増訂版（ミネルヴァ書房、1967年）。

(3) 杉原四郎『経済原論Ⅰ—「経済学批判」序説—』（同文館、1973年）に第2章、第1節として収録されている。

(4) 杉原四郎『ミルとマルクス』増訂版（ミネルヴァ書房、1967年）に附論、その2として収録されている。

II

杉原四郎『マルクス経済学の形成』の「はしがき」は次の四つの部分によって構成されている。⁽¹⁾

第一は、「本書は、マルクス経済学の形成過程を、マルクス・エンゲルスの生涯に即しつつ、思想史的に追求したものである。マルクス経済学の何たるかを把握するためには、その完成形態である『資本論』体系にとりくんで、その内容を理解することが大切であることはいうまでもあるまい。しかし、マルクスは『資本論』において一体何をあきらかにしようとしたか、またかれの意図はそれの中にどのように実現されているかということを正確につかみとるためには、『資本論』そのものの理論的研究だけでは不十分であって、それと同時に、『資本論』の大規模な理論体系がどのような過程をたどって形成されたのかという次第を、マルクスとその協力者たるエンゲルスの多年の研究をおしすすめてきた基本的な問題意識や分析視角の推移をふくめて、思想史的にあとづけて見る必要があるだろう。しかも現代の時点からするマルクス経済学への正しい評価となされるべき発展の方向づけとは、こうした思想史研究を通じてマルクス経済学の内在的理解を十分にゆきとどかせた上ではじめて可能となるとすれば、一見迂遠と思われるこうした研究も、現代的課題の解明のための必要不可欠の作業であるといわなければならないであろう。」⁽²⁾であり、杉原四郎氏の本書執筆の意図だと言えよう。

第二の、「ところでマルクス経済学を『資本論』に即して理論的にとりあつかった書物が非常に多いのにくらべると、マルクス経済学の形成過程に関する学史的乃至思想史的な研究文献ははなはだすくない。もっとも例えば1840年代とか労賃論とかいう風に、時期と主題とを限定した上でのマルクス経済学についての学史的な研究はまれではなく、最近ではそうした研究が外国でもわが国で

(注) (1) 杉原四郎『マルクス経済学の形成』改訂版（未来社、1974年）により、そのページ数を示すものとする。

(2) 前掲書、1～2ページ。

も漸次増加する傾向にある。わたしもそうした学会の動向に刺激されて、前著『ミルとマルクス』（ミネルヴァ書房、1957年）の第1部でマルクス経済学の形成を剰余価値論を中心として展望して以来、ヨリ包括的系統的な形成史をとりまとめることを企図していた。杉原・重田共訳のマルクス『経済学ノート』（未来社、1962年）や、杉原「マルクスの経済本質論に関する一考察」（関西大学『経済論集』 XIII 1・2号、1963年）、同「改良と革命の経済思想」（岩波書店『思想』1963年12月号）などは、そのための準備として作成されたものである。だがマルクス経済学の全体系についての形成史をマルクス・エンゲルスの生涯にわたってあとづけた本格的な通史をまとめるためには、まだまだ多くの基礎がためを必要とするであろう。しかし一方からすれば、このあたりでだれかが最近の諸研究を一応総括し、また『経済学批判要綱』（1953年）、新版『剰余価値学説史』（1956～62年）および1956年以来現在まで八分どおりの公刊を終えた『マルクス・エンゲルス全集』のそれぞれのドイツ語版に盛られた最新の資料を利用して、全体のパースペクティヴを大胆にえがき出した試論を提出するということも、研究水準を新しい段階へとすすめる上で有益であるといえないであろうか。わたしが『経済セミナー』編集部の求めに応じて1963年4月号から1ヶ年（12回）同誌にマルクス経済学講座を連載し、それを基礎として本書をまとめることにふみ切ったのも、こうした考えにもとづいてのことであった。この試論を書くにあたってわたしの留意した諸点やその結論については結言に要約しておいたが、ありうべき不備や謬見についての大方の批判を切望する次第である。⁽³⁾は、杉原四郎氏の本書執筆の動機である。

第三は、杉原四郎氏の本書執筆に際しての一般の読者に対する二つの要望として、「そういう意味で、わたしは専門家による本書の閲読をも念願するものであるが、同時にそれがマルクス経済学についての特殊な概論的入門書として、ヨリ広範囲の人々によって読まれることを期待している。その場合わたしは一

(3) 前掲書、2～4ページ。

般の読者に対してつぎの二つの点を要望しておきたい。第一に、本書はマルクス経済学がどのように生成し確立し完成しかつ発展していったかということを説明するが、それを書くにあたってわたしは読者が『資本論』についての初歩的な予備知識をもっているものだということを前提して執筆せざるをえなかった。そこで読者は、たとえば第10章の参考文献にあげたような書物によって、あらかじめ『資本論』の全体系について概観しておくとともに、本書にくわしい説明なしで使用されている個々の専門用語については、適当な経済学辞典をその都度参照して、正確にその意味をのみ込んだ上で読みすすんでほしい。第二に、本書ではマルクス経済学の形成を時代的背景との関連においてとらえ、時代思潮の発展の中であとづけてゆこうとするから、しばしば同時代の諸事件や諸家の思想に言及している。それでこれらの多くの事がらの縦のつながりと横の関連とを念頭におきながら、それぞれが思想史の全体のなかでしめる位置とマルクス経済学の形成にとって有する意義とについて、たえず留意するようにしてほしい。それには思想史年表のたぐいを座右において始終参照することがのぞましいが、読者が自分の手で本書を素材としつつ年表を編成してゆくことも面白いと思われる。巻末の人名索引やマルクス・エンゲルスの著作リストはそのための資料としても活用することができるであろう⁽⁴⁾と述べている。

最後は、杉原四郎氏が本書執筆に際して感謝しなければならない人々を列挙して「はしがき」を結んでいる⁽⁵⁾。

(4) 前掲書、3～4ページ。

(5) 「はしがき」の最後は次のような文章で結ばれている。

「本書をまとめるにあたってわたしは多くの方々からの御支援をうけることができた。とりわけ、『経済セミナー』への連載の当初からこの仕事に対してあたたかい理解をしめされた小林昇氏、雑誌の出るごとに有益な感想を寄せられた杉山忠平氏、本書の仕上げの段階で専門的見地から種々の助言をあたえられた佐藤金三郎、細見英、同僚の重田晃一の諸氏、これらの方々のお厚情は、非力なわたしにとってどれだけ力強いはげましとなったことであろう。特記して深謝の意を表したいと思う。1964年3月9日、杉原四郎。」（前掲書、4～5ページ）。

以上、杉原四郎氏の『マルクス経済学の形成』、「はしがき」は (1)杉原四郎氏の本書執筆の意図、(2)杉原四郎氏の本書執筆の動機、(3)杉原四郎氏の本書執筆に際しての一般の読者に対する二つの要望、(4)杉原四郎氏の本書執筆に際して感謝しなければならない人々と要約出来るが、(1)、(2)、(3)、それぞれについては問題なしとしない。

(1)に関しては、マルクス経済学の何たるかを把握するためには、マルクスの主著『資本論』に中心をおくことに異存はないが、『資本論』そのものの理論的研究だけでは不十分であり思想史的な追求を説く杉原四郎氏からは一体思想史的研究とは何かを聞く耳が必要であり、思想史的にあとづけるに際して、杉原四郎氏の「マルクスとその協力者たるエンゲルス」の「基本的な問題意識や分析視角」への眼くばりからは杉原四郎氏の基本的な問題意識や基本的な分析視角を読み取る必要がある。以上の二点が理解されてはじめて、唐突とも思える「しかも現代の時点からするマルクス経済学への正しい評価となされるべき発展の方向づけとは、こうした思想史研究を通じてマルクス経済学の内在的理解を十分ゆきとどかせた上ではじめて可能となるとすれば、一見迂遠と思われるこうした研究も、現代的課題の解明のための必要不可欠の作業であるといわなければならないであろう。」という文章の中での難解な語句である「現代的課題の解明」に答を出すことが出来、「はじめて可能となる」、「必要不可欠な作業である」に見られる杉原四郎氏の気負いも十分説得性を持ってわれわれに迫ってくる。

(2)に関しては、「だがマルクス経済学の全体系についての形成史をマルクス・エンゲルスの生涯にわたってあとづけた本格的な通史をまとめるためには、まだまだ多くの基礎がためを必要とするであろう。」と一步後退しながらも、本書が前著『ミルとマルクス』の展開であり、研究文献の少なさを「最新の資料を利用して、全体のパースペクティヴを大胆にえがき出した試論を提出するということも、研究水準を新しい段階へとすすめる上で有益であるといえないであろうか。」という杉原四郎氏のなみなみならぬ意気ごみから前著『ミルとマル

クス』が杉原四郎氏の内部において非常に大きな位置を占めていることが確認出来、われわれは前著『ミルとマルクス』の内的な理解を本書をひもとく準備として是非行なっておかなければならないことに気がつく。

(3)に関しては、第一の読者への要望が経済学辞典の参照であり、第二の読者への要望が思想史年表の参照であると単に理解するだけでは杉原四郎氏の真意を正確につかんだことにはならない。第一については、「そこで読者は、たとえば第10章の参考文献にあげたような書物によって、あらかじめ『資本論』の全体系について概観しておくとともに、本書にくわしい説明なしで使用されている個々の専門用語については、適当な経済学辞典をその都度参照して、正確にその意味をのみ込んだ上で読みすすんでほしい。」に見られる杉原四郎氏の「体系」、「専門用語」への言及である。第二については、「本書ではマルクス経済学の形成を時代的背景との関連においてとらえ、時代思潮の発展の中であとづけてゆこうとするから、しばしば同時代の諸事件や諸家の思想に言及している。それでこれらの多くの事からの縦のつながりと横の関連とを念頭におきながら、それぞれが思想史の全体のなかでしめる位置とマルクス経済学の形成にとって有する意義とについて、たえず留意するようにしてほしい。」で述べられている「時代的背景との関連」、「時代思潮の発展」が杉原四郎氏においては「同時代の諸事件」の「縦のつながり」と「横の関連」、「同時代の諸家の思想」の「縦のつながり」と「横の関連」として時間的かつ空間的に把握されていることに注目することである。そこで、第一、第二の問題点の具体的解明ということになると、(2)杉原四郎氏の本著執筆の動機で指摘した本書の前段階である前著『ミルとマルクス』以外には考えられない。別の言い方をすれば、杉原四郎氏の本著執筆に際しての一般の読者に対する二つの要望は杉原四郎氏が前著『ミルとマルクス』において御自身が留意され、御自身に役立ったことを読者に要望しているのだと言ってもほぼ間違いないであろう。ここに到って、われわれは杉原四郎氏の前著『ミルとマルクス』に問題を移し、(3)、(2)、(1)、と問題を解決していく過程から最終的な目標である杉原四郎氏が強調する思想

史的研究とは何かに一応の答を出してみたいと思う。

III

杉原四郎氏は前著『ミルとマルクス』⁽¹⁾の「はしがき」において「本書は、ここ数年来おりにふれて発表してきた論文のうちから、ミルとマルクスとに関するもの10篇—そのリストは本書の巻末にのせてある—をえらんでとりまとめたものである。それらを収録するにあたって、わたしは、単なる論文集ならぬ共通の問題意識につらぬかれたまとまったものに本書をいくぶんでも近づけるために、そのいずれにもずいぶん筆を加えた。本書を強いて体系立てようとした努力は、しかし、かえって『ミルとマルクス』という羊頭をかかげた本書の不備と欠陥とをきわだたせる結果となったかもしれない。大方の叱正を仰ぐ次第である」⁽²⁾（傍点、片岡。以下同じ。）と、前著『ミルとマルクス』が「共通の問題意識」につらぬかれた「体系」的な書物であると述べ、「共通な問題意識」、「体系」を考慮に入れた上での熟読を求めている。「共通な問題意識」については後述することにして「体系」についてまず考えてみたい。杉原四郎氏の前著『ミルとマルクス』の目次は次の通りである。⁽³⁾

はしがき

凡 例

第1部 マルクス経済学の基本性格

第1章 マルクス経済学の発端

第2章 マルクス経済学の定礎

（注）（1） 杉原四郎『ミルとマルクス』増訂版（ミネルヴァ書房、1967年）により、そのページ数を示すものとする。

（2） 前掲書、1ページ。

（3） 増訂版には附論として

その1 J.S.ミルの新著作集について

その2 改良と革命の経済思想

が付け加えられ、「増訂版へのあとがき」が「人名索引」の前に挿入されている。

第3章 マルクス経済学の確立

第4章 マルクス経済学の基軸

第2部 J. S. ミルにおける社会主義の問題

第1章 ミルの社会主義論の思想的基盤

第2章 マルクスによるミルの思想の批判

第3章 晩年のミルによる社会主義の批判

第4章 ジョン・ステュアート・ミルと日本

人名索引

以上の目次から前著『ミルとマルクス』の体系を理解することは容易ではない。⁽⁴⁾第1部と第2部との関係、とりわけ第2部の第4章の全体のなかでの、また第2部内での位置づけは難解である。その難解さを解く鍵は前述したⅡの『マルクス経済学の形成』、「はしがき」での(3)杉原四郎氏の本書執筆に際しての一般読者に対する二つの要望の第二の要望のなかにある。第二の要望において、時代が「時代的背景との関連」、「時代思潮の発展」として諸事件と諸家の思想との二面から把握され、同時に「同時代の諸事件」の「縦のつながり」と「横の関連」、「同時代の諸家の思想」の「縦のつながり」と「横の関連」として、時代は時間的かつ空間的に把握されなければならないと説く杉原四郎氏の方法

(4) 杉原四郎氏は本書第2部、第2章「マルクスによるミルの思想の批判」において、J.S.ミルとマルクスを『経済学原理』と『共産党宣言』（1848年）、『自由論』と『経済学批判』（1859年）、『社会主義論』と『ジョン・ステュアート・ミルの経済学説に対する一労働者の反駁』（1869年）と対応させておられるが、杉原四郎氏の体系は単純にそのようなものでは説明がつかない。したがって高島善哉氏の「スミスとリストの研究は、当時の私にとっては、おし寄せるファシズムへの批判と抵抗の意味がこめられており、そこには一貫したある一つの見方、立場というものがあった。今日でもよく見かけるように、私の『スミスとリスト』は、ただたんに〇〇〇と×××というようなものではなかった。（たとえばミルとマルクス、ウェーバーとマルクスといったたぐいである）こうした場合、えてして〇〇〇と×××は内的になんのつながりもなく、ただ「と」というひとことで結ばれているにすぎないのである。それではこまる。」（1971年3月16日、『朝日新聞』夕刊掲載の「『経済社会学』をめぐって…処女作のころ」）文中の「〇〇〇と×××」、「たとえばミルとマルクス」に対する指摘は、杉原四郎氏の『ミルとマルクス』とは無関係である。

論からすれば第1部はマルクスを「時代的背景との関連」を問題にしながらマルクスの「思潮の発展」を追求したことになり、第2部はミルをマルクスと同時代人と位置づけることによってマルクスとの「横の関連」を問題にし、同時に「時代的背景との関連」を考慮に入れながらミルの思想の発展をミルの死後にまで「縦のつながり」として追求することによって「横の関連」を東洋の日本にまで拡げていったと考えるとすれば、杉原四郎氏のいう本書を強いて「体系立てようとした努力」がわれわれに伝わってくる。この視角を定めておいて『ミルとマルクス』を読み進むならば、第1部、第1章、第9節の「大綱」がドイツ・イデオロギーの弱点や初期社会主義思想の甘さを完全には脱却していないことは本章においてもしばしば指摘したごとくであるが、それが内蔵する幾多の誤謬や欠陥にもかかわらず、同時に包含する科学的社会主義への珠玉の萌芽を、当時の社会主義的および経済学的諸文献との横のつながりにおいて、また、それ以前および以後におけるマルクス・エンゲルスの諸文献との縦の流れにおいて、正当に評価することは、マルクス主義経済学の十全な理解とその発展とのために、現在なお決して無意義ではないであろう⁽⁵⁾」が目にとまり、IIで指摘した『マルクス経済学の形成』、「はしがき」での「縦のつながり」、「横の関連」が「縦の流れ」、「横のつながり」となっているにせよ「同時代の諸家の思想」の「縦のつながり」、「横の関連」が問題にされていることに気がつく。また、第2部、第3章、第1節の「これほど極端ではないが、『原理』第3版と遺稿との対照を強調することをいましめる主張もすくなくないのであって、この遺稿からミルの真意をくみとってこれを正当に評価するためには、われわれは、彼の他の著作との関連や時代的背景の推移、さらにはライオネル・ロビンスの力説するミルの特異な個性までも考慮に入れつつ、慎重にとりあつかなければならないであろう⁽⁶⁾」の文章からは、「他の著作との関連」で「時代思

(5) 前掲書、54ページ。

(6) 前掲書、213ページ。

潮の発展」が、「時代的背景の推移」で「時代的背景との関連」が把握されていると理解するならば、時代が事件と思想の二面からも把握されていることにも気がつき、前述したⅡの『マルクス経済学の形成』、「はしがき」での(3)杉原四郎氏の本書執筆に際しての一般の読者に対する二つの要望の第二の要望は、前著『ミルとマルクス』で杉原四郎氏御自身が留意し、御自身に役立った方法であることを、われわれは具体的に理解することが出来る。

次に前著『ミルとマルクス』の目次からは、第1部、第4章「マルクス経済学の基軸」のサブタイトル、「『資本論』の基礎範疇としての必要労働と剰余労働」に注目する必要がある。杉原四郎氏は前著『ミルとマルクス』第4章、第1節で本章の前半の目的を次のように言う。「剰余価値の源泉を剰余労働にまで遡及せしめるところにこそ資本の自己増殖の秘密を解く鍵があるということ、ここにそれが「決定的」とされるゆえんがある。この観点からすれば、『資本論』の第1章「商品」から第6章「不変資本と可変資本」にいたる叙述は、いわばこの鍵を見出すために不可欠な諸基本概念をあきらかにしてゆく過程であり、第8章「労働日」以下の叙述は、この鍵をもちいて歩一歩複雑な現実に迫りゆく過程であるとも見られるであろう。また、マルクスが『資本論』の随所においてさらにその第4巻たる『剰余価値学説史』においておこなっている「経済学批判」—『資本論』の副題—の基本視角もまたここにすえられていると見てよいであろう。かくて必要労働・剰余労働という概念の「決定的」意義を、『資本論』全体系との関係において論理的に、従来の学説とくに古典学派との関連において学史的に、解明すること、これがマルクス経済学の理解における一基本問題となる。本章は、その前半において、この問題に対する序論的素描を試みる⁽⁷⁾。ここではとりあえず杉原四郎氏が「諸基本概念」と「『資本論』全体系」との関連を本章のサブタイトル「『資本論』の基礎範疇としての必要労働と剰余労働」として把握していることが理解出来、サブタイトルが本章のタ

(7) 前掲書、122ページ。

イトルでもある「マルクス経済学の基軸」である意味を本書第1部の末尾でもある本章の最後の文章で次のように述べている。「人間にとって労働が本質的なものであること、その労働が資本主義社会において極端な自己疎外に陥っていること、それを本然の姿に回復させるためにはプロレタリアートの解放が必要であること、かくしてプロレタリアートの解放は同時に人間そのものの解放であり人類的社会の建設に外ならないこと、およそかくの如き思想は、マルクスがそもそも経済学の研究に志した当初から抱いていたもの、いな、かかる思想こそマルクスをして経済学の研究に出発せしめた原動力であったものであることは、本書の第1および第2章で詳論したごとくである。またこのような問題意識にささえられたマルクスの経済学の研究が、数10年の刻苦にみちた歳月を経て、ついに『資本論』体系をささえる基礎範疇をうみ出すにいたった過程についても、すでに本書第3章および第4章の前半において概説したごとくである⁽⁸⁾」そしてそれに続けて、前半の目的に続く本章の後半の目的をも踏まえて「そして最後に、いま、われわれは、マルクスの思想体系の特質を、彼の労働観を中心として、総合的に考察した。エンゲルスは『フォイエルバッハ論』の末尾でマルクス主義思想の特色を『労働の発展史のうちに社会の歴史全体を理解する鍵をみとめた』ところにもとめている（⑮ 505）が、本書の第1部は、このような特色をもつマルクスの思想を正しく理解するための一つのところにすぎないのである。」⁽⁹⁾と結ばれるのであるが、本章の最後の文章でわれわれが注目するのは杉原四郎氏がいう「マルクスの経済学の研究が、数10年の刻苦にみちた歳月を経て、ついに『資本論』体系をささえる基礎範疇を生み出すにいたった」の「『資本論』体系」と関係づけられた「基礎範疇」である。ここに到って前述したⅡの『マルクス経済学の形成』、「はしがき」での(3)杉原四郎氏の本書執筆に際しての一般読者に対する二つの要望の第一の要望の中で言及されている「体系」、「専門用語」が前者の引用においては「『資本論』全体系」、

(8) 前掲書、149 ページ。

(9) 前掲書、149 ページ。

「諸基本概念あるいは必要労働・剰余労働という概念」また後者の引用においては本章のサブタイトルをも考慮に入れて「『資本論』体系あるいは『資本論』」「基礎範疇あるいは基礎範疇としての必要労働・剰余労働」として取り出された概念の延長線上の諸概念であることは明らかである。以上、IIの(3)杉原四郎氏の本書執筆に際しての一般読者に対する二つの要望を前著『ミルとマルクス』で押えることが出来たわれわれがIIの(2)杉原四郎氏の本書執筆の動機として、前著『ミルとマルクス』を位置づけるためには、これに加えるに前著『ミルとマルクス』の「はしがき」の中、後述すると断わった「共通な問題意識」に答を出すことによってなしとげられるであろう。

「共通な問題意識」については、前著『ミルとマルクス』第2部、第1章、第1節の「そしてこの場合、私はミルと同時代に、社会主義という同一問題との対決を、やはり哲学的認識論から具体的な革新のプランに至る広大な思想体系の建設によってはたしたところの**マルクス主義**との対比という方法をとつつ研究してゆきたいと思う」⁽¹⁰⁾中の「社会主義という同一問題との対決」、同書第2部、第2章、第1節の「そこで本章は、前世紀なかばの社会問題との対決という共通の問題意識から生じたこの二つの偉大な思想体系の全面的な比較検討という興味ふかい課題に立ちむかうための基礎作業の一つとして、云々」⁽¹¹⁾中の「社会問題との対決という共通の問題意識」、同書第2部、第2章の結論部分である第4節の「1857年の最初の世界恐慌以後反動的停滞を脱しはじめた客観情勢は、60年代に入って新しい段階に入り、ミルもマルクスもともに活発な多面的行動を再開する。前者は下からのラディカルな変革をおさえるために旧体制の支配力をより精密・高級なものに改良せんとするイギリス産業資本の優秀な思想的選手として。後者はプロレタリアートの国際的組織を通じイギリスを拠点として社会主義的世界革命を準備する労働運動の中核的指導者として。両者

(10) 前掲書、158ページ。

(11) 前掲書、187ページ。

がそれぞれに代表する勢力は、アメリカの奴隷解放戦争やイギリスの選挙法改正やに対しては協調する側面をもちながらも、第1インターナショナルがマルクスの方向に発展してゆくに従って漸次対立の側面をあらわにするのであって、1867年の第2次選挙法改正を契機としてイギリス労働階級の指導者たちの第1インターに対する態度は消極的となり、普仏戦争に対してなお共同歩調をとりえた両勢力も、パリ・コンミュンに対する態度ではついに決定的に対立し、かのオッジャーはもとよりエッカリウスでさえもマルクスと袂をわかちにいたる。マルクスがそれによって『世界史的に重要な一つのあたらしい出発点がえられた』としたところのこの事件は、ミルをして『労働者階級の自然の渴望に合法的な満足にあたえるという目的』をもった社会問題研究の重要性を痛感せしめるのであって、パリ・コンミュンはこの二つの社会主義の本質を照明するにも役立ったといいうるであろう。マルクスはこのような二つの社会主義の対決という問題意識のもとに第1節で見たような『資本論』第1版（67年）・『反駁』（67～9年）・『資本論』第2版（73年）等におけるミル批判をおこなったということ、そして、その場合の批判の基本的観点を第2節および第3節でのべたような彼の思想の発展過程を通じて確立して行ったということ、本章はこれらの点を明らかにしようとしたのである。しからば、ミルの側からのマルクスの社会主義に対する批判は如何。この問題を晩年のミルがマルクスの社会主義を念頭において書いた遺稿『社会主義論』を中心としてとりあげることが、次章のテーマとなる⁽¹²⁾の文全体の内容から、あるいは「二つの社会主義の対決という問題意識」という語句から「共通な問題意識」は容易に社会主義であることがわかる。そして「共通な問題意識」である社会主義は続く同書の第2部、第3章、第6節の末尾で「また彼の社会主義論の特質、そこに集中的に表現されている彼の思想の過渡的折衷的性格は、さきにものべたように、これを彼と同じ時代に同じ問題を、同様に経済学を中心とする広大な思想体系に

(12) 前掲書、207～8ページ。

よって解決しようとしたマルクス主義との対比によって、もっとも明確に浮彫することができるであろう。本書の第2部は、このような研究のためにこころみられた、ささやかな一つの基礎作業の記録である⁽¹³⁾中の「経済学を中心とする広大な思想体系によって解決しようとした」との一文が、「増訂版へのあとがき」の「資本主義から社会主義への体制的移行の問題をいずれも経済学を中核として体系的に考えぬいたこの現代経済思想の二大想源を対比しつつ研究する、という基本視角に共感する人々が、ミルやマルクスの思想を検討してゆかれる上に、この増訂版がいささかでもお役に立つことをこいねがうものである⁽¹⁴⁾」が考慮に入れられるとき、「経済学」という「分析視角」から追求されていることに気づくであろう。ともあれ、前著『ミルとマルクス』の問題意識は社会主義であり、分析視角は経済学であるとの認識は重要である。ここに到って前著『ミルとマルクス』に限定しての『マルクス経済学の形成』「はしがき」の(3)杉原四郎氏の本書執筆に際しての一般の読者に対する二つの要望の解明と、同じく「はしがき」の(2)杉原四郎氏の本書執筆の動機としての前著『ミルとマルクス』の位置づけは終り、次には、同じく「はしがき」の(2)杉原四郎氏の本書執筆の動機の中で杉原四郎氏が『マルクス経済学の形成』の準備として作成したという他の二論稿、「マルクスの経済本質論に関する一考察」、「改良と革命の経済思想」を併せ考えることによって同書「はしがき」で最後に残された(1)杉原四郎氏の本書執筆の意図の中の問題点に移ることになる。

IV

杉原四郎『マルクス経済学の形成』、「はしがき」のIIで整理した(1)杉原四郎氏の本書執筆の意図の個所で先ず目につく概念は基本的な問題意識であり基本的な分析視角である。前著『ミルとマルクス』における「共通な問題意識」は社会主義であるということはIIIで指摘した通りであるが、問題意識それ自身の

(13) 前掲書、239～40ページ。

(14) 前掲書、301～2ページ。

もつ危険を杉原四郎氏は「マルクスの経済本質論に関する一考察」で次のように述べている。「最近の初期マルクス研究の進展に刺激されて、マルクスの人間ないし労働観の原型を1840年代前半の諸論稿に見出し、それにもとづいてかれの経済本質論を構成しようとする試みもなされているが、かれの思想の哲学的契機と経済学的契機とが具体的な統一性を端的に示している初期マルクスの特質は、同時に研究者の問題意識にしたがってさまざまの主観的・一面的な解釈を生み出させる危険性をはらんでいて、マルクスの思想の全体像を、すなわち哲学と諸科学とのすべての側面にわたって、また初期から後期への発展を一貫して、統一的に展望しうるような経済本質論を構成することは、いまだ将来の課題としてのこされているように思われる⁽¹⁾」また杉原四郎氏は「改良と革命の経済思想」においては、「わたしがさきにミルの『経済学原理』を**改良**の経済思想とよんだのは、資本主義の体制的変革という問題意識を共通の前提とした上で**革命**の経済思想とするどく対立するところの改良思想なのであって、もしミルの思想が彼の主観的意図においてすでに修正資本主義的な改良思想の域を出ないとしたら、一論者が最近ころみたように、ミルの思想を哲学的急進主義の解体過程を代表するものとしてとらえ、これを同じ哲学的急進主義の極端な一形態としてのオーエンの思想と対比させることに思想史的興味が見出せるかもしれないけれども、ミルとマルクスとの対抗というような問題設定は、はじめからほとんど無意味なものになってしまうであろう⁽²⁾」と述べている。これに対して、杉原四郎氏は前著『ミルとマルクス』において第1部「マルクス経済学の基本性格」の問題意識は第2章「マルクス経済学の定礎」第2節では「労働の自己疎外とその止揚という問題意識の根底には、労働は本来人間存在にとって基本的かつ積極的意義をもつものであるとする人間観が存在しなければな

(注) (1) 杉原四郎『経済原論Ⅰ―「経済学批判」序説―』（同文館、1973年）、49～50ページ。

(2) 杉原四郎『ミルとマルクス』増訂版（ミネルヴァ書房、1967年）、290 ページ。

(3) 前掲書、69ページ。

らない⁽³⁾』として、マルクス自身の問題意識が「労働の自己疎外とその止揚」であることを指摘し、続く第3節において「かくてマルクスにとっての問題はこうである『いかにして人間はかれの労働を**外化**し、疎外するようになるか、いかにしてこの疎外が人間の発展の本質のうちに基礎づけられているか。……とここでこの問題の新しい提起はすでにその解決を含んでいる』（同上）。マルクスはこのような問題意識のもとに、さきにのべたようにスミスやセイやリカードなどから主として賃金・利潤・地代等に関する理論的成果を批判的にとり入れ、さらにシュルツやペクエールやビュレなどから資本主義下における労働者の現状分析をまなびとりながら、第1手稿の終り、全集編輯者によって『疎外された労働』となづけられた部分（81～94）において、上述の問題に対する自己の立場からの一応の解答の方向を与えている⁽⁴⁾』として、マルクス自身の問題意識がおのずと分析視角を定め、その結果が一応の解答を可能にしたことを示唆した上で、マルクシズムの「総括」であるとされる『資本論』との関係において、マルクスの『経済学・哲学手稿』におけるマルクスの問題意識は本章の結論部分である続く第4節の末尾において次のように述べられている。「『手稿』においてはじめて、『労働の自己疎外とその止揚』という問題意識が、『三つの源泉』からの批判的摂取を通じて、理論的に明確化されてくること、まさにその意味においてそれがマルクス経済学の定礎であり、河合栄治郎氏の言葉をかりるならば、『以前のものの決算が此の中に明瞭に示されていると共に、新しきものが萌芽を蔵しているという点において、正に彼の思想上の峠に位するとも考えられる』（『経済学論集』第7巻第1号82ページ）のであるが、その理論的内容が『資本論』との関連においてもつ意義の測定に、あたかも今かか

(4) 前掲書、76～7ページ。

(5) 「『手稿』から『資本論』への刻苦にみちた研究過程を理解するために、その間にあ
る三つの里程標として、〔A〕『ドイツ・イデオロギー』（1845～6年）、〔B〕『共産党宣言』
（1848年）および〔C〕『経済学批判』（1859年）をとり、両者の関係をつぎのように考
えたい」（前掲書『ミルとマルクス』、82～3ページ）。したがって以下の〔A〕、〔B〕、
〔C〕はそれぞれ、『手稿』が『ドイツ・イデオロギー』、『共産党宣言』、『経済学批
判』との関係で論じられている。

げた三つの里程標と『手稿』との時間的距離が役立つであろう。〔A〕『手稿』においてすでに、マルクスの哲学的唯物論はその基礎においてでき上がっていること、〔B〕『手稿』の中ですでに『共産党宣言』とほぼ同様の諸社会主義批判の立場に立っていることはすでにのべたごとくである。事実『手稿』から『ドイツ・イデオロギー』や『宣言』まではわずか数年にすぎない。〔C〕しかるに『手稿』と『経済学批判』との間には実に15年の歳月が横たわっている。研究の導きの糸はあたえられ、実践の主体的立場も定まったとしても、ブルジョア社会の経済的細胞形態たる商品の価値形態の『細かい穿鑿だて』（『資本論』I.6）のためには、なおはるかに遠い刻苦にみちた研究過程がたどられなければならないのであった。⁽⁶⁾ 前著『ミルとマルクス』においては以上のマルクスの問題意識が杉原四郎氏によって徹底的に追求され、第3章「マルクス経済学の確立」、第4章「マルクス経済学の基軸」として結実するのであるが、その不備がその後著である『マルクス経済学の形成』冒頭が第1章「経済学批判としてのマルクス経済学」、1「マルクス経済学の定礎・確立・完成」であることを考慮に入れるとき、マルクスの「労働の自己疎外とその止揚」という問題意識に重ねた杉原四郎氏の問題意識は前著『ミルとマルクス』から『マルクス経済学の形成』に到るまで基本的な問題意識として脈々と受け継がれていることに気がつくことは容易であろう。杉原四郎氏が『マルクス経済学の形成』、「はしがき」において「マルクスとその協力者たるエンゲルスの多年の研究をおしすすめてきた基本的な問題意識の推移」への眼くばりを思想史的研究の中で強調していることは以上の説明によって当然の帰結と考えられてよいであろう。

次に分析視角については前著『ミルとマルクス』の場合、経済学であるとⅢで一応指摘してはおいたが、なおくわしく分析視角概念を検討するうちに次のような結論が得られる。前著『ミルとマルクス』第1部、第1章「マルクス経済学の発端」第4節で、「この場合注意すべきは、『手稿』の「大綱」からの

(6) 前掲書、84ページ。

摂取が、『手稿』全体を貫く『労働の自己疎外』という基本視角からなされていることであって、経済学批判における「大綱」から『手稿』への進歩は、単に後者の対象とする経済学が素材的にヨリ広汎且つ詳細となった点にあるだけでなく、分析視角における質的深まりにこそ存するのでなければならない⁽⁷⁾』としてマルクス経済学がエンゲルスの経済学を発端としているにせよマルクスの経済学の分析視角の独自性が指摘されており、続く第3章「マルクス経済学の確立」第4節では、「とくに本章の分析視角からすれば、1859年での『経済学批判』プランには未だ見ることをえなかった『標準労働日のための闘争』という項目がここにはすでに存在している点が注目にあたいするところであって、われわれはここに現行『資本論』第1巻、第3篇の原型を見ることができるのである⁽⁸⁾』としてマルクス経済学の分析視角がヨリ展開することによって『資本論』体系に結実することを示唆し、続く第2部、第1章「ミルの社会主義論的思想的基盤」においてミルの社会主義論をミルの経済学の中に位置づけるだけでなくマルクス経済学の分析視角によって批判的に検討されなければならないことを次のように述べている。「ところでこのような過程をとおして成長し変貌し円熟したところの広大なミルの思想体系の基本性格を正しく理解するために、われわれはどのようなアプローチを彼の充実した生涯と業績とに対してこころみてゆけばよいであろうか。わたくしは、ミルが、あたかも彼がその生涯をおくった時代においていわゆる『空想から科学へ』と進化し、単なる個々人の思想から明確な実践目標をもつ組織的運動にまで発展したところの**社会主義**をどう考えたか、という問題に分析の視点をすえて研究してゆくことによって、通例**過渡期**の思想家とよばれているミルの思想の歴史的個性を、1830年頃から胎動し、48年革命を画期とする現代史の基本線との関連において最も明確に浮彫しうると同時に、ミルの思想の本質としてこれまた誰しもいうところの**折衷**的性格を、個々の問題領域においてでなく、それらを貫流する彼のヴィジョン

(7) 前掲書、28ページ。

(8) 前掲書、114 ページ。

ないし思考方法において統一的に把握することができると考える。そしてこの場合、私は、ミルと同時代に、社会主義という同一問題との対決を、やはり哲学的認識論から具体的な革新のプランに至る広大な思想体系の建設によってはたしたところのマルクス主義との対比という方法を取りつつ研究してゆきたいと思う。⁽⁹⁾ここに到って分析視角は経済学一般でもなくミルの経済学でもないマルクスの経済学の分析視角が前著『ミルとマルクス』で駆使されているとすれば、『マルクス経済学の形成』においてはマルクス経済学の定礎・確立・完成として『資本論』体系に到るマルクスの「基本的な分析視角の推移」への眼くばりもまた当然の帰結と言えるであろう。以上、杉原四郎氏の「マルクスとその協力者たるエンゲルス」の基本的な問題意識、基本的な分析視角への眼くばりを理解したわれわれは最後に杉原四郎氏の思想史的研究とは何かに答を出す時期である。

V

杉原四郎氏の『マルクス経済学の形成』は前著『ミルとマルクス』の展開であるにしても、前著『ミルとマルクス』の単なる続巻ではなく、前著『ミルとマルクス』の第1部「マルクス経済学の基本性格」の延長線上に把握さるべきものである。その場合、『マルクス経済学の形成』「はしがき」も再度読みなおすとすれば次のように理解出来る。IIで分析した『マルクス経済学の形成』

「はしがき」(3)杉原四郎氏の本書執筆に際しての一般の読者に対する二つの要望も第一の要望、第二の要望は決してバラバラなものではなくて、第一の要望は「マルクスとその協力者たるエンゲルスの多年の研究をおしすすめてきた基本的な問題意識や分析視角の推移」が基礎範疇の確立を通しての『資本論』体系への結実として理解されており、第二の要望も「マルクスとその協力者たるエンゲルスの多年の研究をおしすすめてきた基本的な問題意識や分析視角の推移」が「時代的背景」、「時代思潮」との関連で、具体的には「同時代の諸事件」

(9) 前掲書、158ページ。

・「同時代の諸家の思想」が「縦のつながり」、「横の関連」として時間的、空間的に追究されているとするならば、杉原四郎氏の思想史的研究方法は一応Ⅱで分析された(3)杉原四郎氏の本書執筆に際しての一般の読者に対する二つの要望の中で提出されていることになる。しかしそれだけではない。

それだけではないという手懸りをつかむためには、前掲論文「改良と革命の経済思想」の末尾の次の文章に注目する必要がある。「経済の世界がエリート
の力と決定的瞬間とがものをいう政治の世界とちがって一般大衆の日常不断の
いとなみからなるものであり、かつ生産力の発展による人間の解放が人間社会
における全体と個体との相互関係に疎外現象が生ずる危険をなくしてゆく傾向
とかならずしもただちにむすびつくものでないかぎり、マルクスの革命の経済
思想が、社会改革の歩みの漸進性と社会構造における部分の自主性との重要さ
をあくまでも強調するミルの経済思想を、改良の経済思想の一典型としてかえ
りみる必要は、『あるみじかい、やや不足がちな、だがいずれにせよ道徳的に
ははなはだ有益な過渡期』においてのみならず、新しい社会が定礎された後
においてもなお、全くなくなってしまうものではないようにわたしには思われる
のである。」⁽¹⁾この文章における杉原四郎氏の経済の世界が「一般大衆の日常不断
のいとなみからなるもの」として、マルクス、ミルの世界から日常性の世界に
眼が向けられていることは重要である。杉原四郎氏が『マルクス経済学の形成』
「はしがき」(1)杉原四郎氏の本書執筆の意図の個所で「マルクスとその協力者
たるエンゲルスの多年の研究をおしすすめてきた基本的問題意識や分析視角の
推移」の強調は単にマルクス、エンゲルスの基本的な問題意識、基本的な分析
視角の強調であるばかりでなく、また単にマルクス、エンゲルスを追及する杉
原四郎氏の基本的な問題意識や基本的な分析視角にとどまっているのではなく
て、杉原四郎氏いやわれわれの日常における基本的問題意識、基本的分析視角
の重要性の指摘と理解されないかぎり、杉原四郎氏のいう「一見迂遠と思われ

(注)(1) 前掲書『ミルとマルクス』、299ページ。

マルクス経済学の再生

「こうした研究も、現代[・]的[・]課[・]題[・]の[・]解[・]明[・]の[・]た[・]め[・]の[・]必[・]要[・]不[・]可[・]欠[・]の[・]作[・]業[・]であるといわなければならないであろう」の「現代[・]的[・]課[・]題[・]の[・]解[・]明[・]」とは何かに見当もつかないであろう。

われわれは日々の生活において様々な問題に遭遇する。われわれが遭遇した様々な問題には、われわれは問題意識を持ち、分析視角を定め、問題を分析対象としたうえで、分析用具を媒介にして問題を解決する方法しかない。その意味においてわれわれが日常性においても、問題意識、分析視角を持つということはきわめて重要なことといわなければならない。中途半端な問題意識や分析視角ではなく基本的な問題意識、基本的な分析視角の確立が要請されるゆえである。杉原四郎氏の思想史的研究方法とは『マルクス経済学の形成』「はしがき」にいう単に「『資本論』の大規模な理論体系がどのような過程をたどって形成されたかという次第を、マルクスとその協力者たるエンゲルスの多年の研究をおしすすめてきた基本的な問題意識や分析視角の推移をふくめた⁽²⁾」思想史的研究ではなしに、われわれ自身の日常性における問題意識、分析視角をマルクス、エンゲルス、杉原四郎氏に重ねてゆくことを杉原四郎氏がわれわれに要請している、その意味における思想史的研究であり、そこに杉原四郎氏の思想史的研究方法の特色がある。杉原四郎氏が『マルクス経済学の形成』「はしがき」で続けていう「しかも現代の時点からするマルクス経済学への正しい評価となされるべき発展の方向づけとは、こうした思想史的研究を通じてマルクス経済学の内在的理解を十分にゆきとどかせた上ではじめて可能となるとすれば、一見迂遠と思われるこうした研究も、現代[・]的[・]課[・]題[・]の[・]解[・]明[・]の[・]た[・]め[・]の[・]必[・]要[・]不[・]可[・]欠[・]の[・]作[・]業[・]であるといわなければならないであろう⁽³⁾」をわれわれは以上の意味を踏まえて杉原四郎氏の問題提起として受け止め、われわれが杉原四郎氏の『マルクス経済学の形成』を順次取り上げていくことの中に、マルクス経済学の再生がある。

(2) 前掲書『マルクス経済学の形成』、1 ページ。

(3) 前掲書、1 ～ 2 ページ。